## 山茶花

水野仙子

真實にお裁縫が好きつていふ女はめつたにないで も少くないでせうけれど。まあ貴女綺麗に出來まし も少くないでせうけれど。まあ貴女綺麗に出來まし たこと、お上手ねえ?貴女裁縫お好き?と續いて聞 いてごらんなさい、必といゝえ私真實は嫌ひなんで すけど……仕方がないわ、といふでせう。何が仕方 がないんだかわからないけれど、實際仕方がないや うな氣がするんです。縫ひ出してみればさほどでも ないですけれど、たゞ縫ひ初めるまでが億劫でね、 お裁縫そのものよりもこの億劫な思ひが嫌ひなのか お裁縫そのものよりもこの億劫な思ひが嫌ひなのか

> するんです。 度に、貴女お裁縫お好き?と定つて聞きます。いゝ をいわですから、あゝ私ばかりぢやなかつたと安心 ないわですから、あゝ私ばかりぢやなかつたと安心 ないわですから、あゝ私ばかりぢやなかったと安心

もしますので、私は必とお裁縫をして居る人を見る

三月の卒業式が終へると、おつ母さんなり姉さんなりには澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。 には澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。 では澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。 では澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。 では澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。 では澤山お弟子をあつかろ家が三四軒ありました。

私達はそれが〜連れられて行くんです。皆さんへと樣のところへ賴みに行きます。さうして日を決めてりが、お菓子折か何かを持つて好いと思つたお師匠

てお菓子を買つて行くとかおすしをこしらへるとか

しましてね

私 の行きましたところは山の伊勢やと言つて、 檜

の生垣に

園まれた

畑の中の家でした、

旦那さんは

背い

の小さい可なりのお爺さんで、直ぐ傍にある生糸の

社に出てました。 お師匠様は其家の後妻で士族の娘

志願の少尉でした。 ださうです。子供はありませんで先妻の息子は一年 別段不足もない生活なんですか

5 知つた家の娘とかなんかでなけりやめつたにあ

づかりませんでした。私は無理に其家に賴れたんで

引出しのついたお針箱や新らしい尺度だのくけ

臺だのを買つて貰つた時は嬉しかつたけれど、 何が

す。

さて毎日~~テニスに夢中になつて、 桃割れ の話を

0

襟の中へ埋めてた私ですもの、座りつけないでせう、

一日きちんと座つて首を埀れて、 針の先をちく~~ **過**る

やつてるのは隨分苦痛でした。初めのうち

ĺ

取り

に立つ時なぞ、 お膝が痛くて跛をひいたりして笑は

れたものです。

今考へてみると、 あの頃はまるで遊びに行つてた 大業にお辨當なんか持つて

やうなものですわね。

風呂敷包みを抱へて、一かどの姉さんぶつて・・・・さ

う――あの時分は私よく赤い帶をしめて紫メレンス の前掛けをしめてました・・・・さうして、夕方になつ

て歸つて來るんですが、俄に家の中にはいると眞つ

暗で、それでもまだ其頃までは佛壇に一瞥を與へる

のはやめませんでした。 おやつに出たものなぞが一皿づゝそこに取つてあ 何故つていへば大抵その

りましたから。

のが さて一日の仕事はツていへば、 の山位なんです。さうでせうたわいもない話 裏表の袖を縫つた

す。 ですもの、手の方はどうしたつておろそかになりま おまけに私なんか今朝出がけに受取つた雜誌な

をしては體を搖つて笑つたりなんかばかりしてるの

師匠さんが起つた後をねらつてはちよい――偸みし んぞをそのまゝ風呂敷の下にしのばせて置いて、お

たり、 食やすみとかけてお晝食後の遊びが長かつた

りばかりしてたのですもの。

こにも時代がありましてね、 十六七から二十二三の女です。やつぱりこんなと 役者の噂なんかばか

等はまあ、 りしてるやうな人達が集まった頃もありました。私 お嫁入り近い . 人達がお師匠さんと何處其

處こ

(の結納物の話なんかしてる間に、

女學校に行けな

てる友達の噂さなんです。一頻り良人の自白が持て かつた不平だの、 さもなければ、方々の學校に行つ

た。 ましてね、なんぞといへば俊三が引張り出されまし 伯爵夫人の數馬に力瘤を入れたり、とかく小説

す。またあの頃はどうしても男の友達を要求する傾 中の主人公を世にある人のやうに大騒ぎしたもので

きがありますわね、 お友達の親類の若い人達が、冬

達と一緒に停車場まで送り迎へしたりして、 それが

の休みや夏期休暇で歸つて來る制服姿を、

そのお友

わけもなくかう嬉しいやうな名譽なやうな氣がした

ものです。考へてみると微笑まれますわ。

一人息子の少尉のお嫁さんは町のうちの本屋 で娘

じく並んで毎日お裁縫ばかりしてました。 一寸粹な容子の人でして、 その弟に

やはり私らと同

でした。

私らと同い年か一つ年弱かつていふ位でした。地方要一さんといふ人がありまして、年はさう十五六、

の中學校へ行つて居つたのですが、日曜には大抵必私らと同い年か一つ年弱かつていふ位でした。地方

の伊勢屋へもやつて來ました。それが今になつて考

と家へ歸つて來ます。さうして午後になると必と山

へて見るとほんとうに可笑しいんです。

た――はひどく弟思ひの人でして日曜といふと必とお稻さん――お嫁さんの名はお稻さんといひまし

もやつぱりそれが待たれるやうな氣がするんです。もう朝から心待ちして居るんですよ。ところで私ら

女がぞろりと並んでるんでせう、さすがに氣がさし

氣味に悄氣てる要一さんを圍んで、私達はいろ~~

白いこともないんですが、たゞ何がなし言葉を交へな話を其處から引ずり出さうとするんです。別段面

れど。

て見たいんですね。これはあながち私らが一日座り

込んで退屈してるからと、いふわけぢやなからうと

に來られようものなら話がなくて妙に黙り込んでし思ふんですの。だつてこんな時になまなか女の人達

可とはなって長り合うがあるこのですつ。

まひますもの。かう男といふものを對象とするのは

何とはなしに張り合ひがあるものですわ。

きなどを持つてました。あらまあ綺麗ね、 私も編ん要一さんはよく赤い糸で編んだ栞だの綺麗な肘つ

でみませうや、 この次まで貸してゝね、その代り私

も何か一つ編んであげるわ、と言つてそれの挾まつ

てる本ごと借りて行く人もあります。

さうして後で

要一さんは誰れにあんなものを編んで貰ふんでせう

ねと心配するんです。心配つていふのもおかしいけ

また繪葉書の交換もしましたわ。あの時分は身體

にしろ心にしろじつとしては居られないんですね。

絶ずかう何物かを探してるやうな氣持です。

また非

常に人の手紙の嬉しかつた時代です。自分もまた盛

した。私なんかよく母から手紙書くのを商賣にしてんに書ました。殊に異性に向つて張り合ひがありま

ると言はれたものです。なんていつたらいゝでせう、

何をするにも張り合ひがありましたわね、心が張り

切つて、そして充實してたんですわね。

この頃はあの時代なんて言つてあの頃のことを引

き離して考へることが出來るやうになりました。私

いふわけかあの頃のことを思ひ出すたびに、きまつもいつの間にか年を取つたのでせう。さうしてどう

て山茶花――と想ひがつながつて來るのです。

今でもあの時分のことを靜に考へて居ると、家の

來て、昨日貰つて來たばかりの子犬が鎖につながれ前に並んで居る背の高い山茶花の花が薄赤く咲いて

てくう~~言つてるのが耳について來ます。

底本:「文章世界」明治四十三年五月

テキスト入力:小林 徹

公開:令和四年三月六日

リンク:水野仙子「作品年譜」

水野仙子ホームページ